分教場の跡を訪ねて　その(四)

宇目町　重岡小学校　宗太郎分校

高　司　良　恵
（会員・佐伯市宇山区）

宗太郎分校沿革

・大正八年九月　三本谷分教場鉄道工事中止のため廃校、在来の宗太郎区児童は松葉（北川町松葉）に通学

・昭和二十八年四月　宗太郎分校開設（延岡営林署木炭倉庫仮校舎）

・昭和二十九年十月　宗太郎分校新築落成
木造平家建百五十七平方米　校地は延岡営林署貯木場借用五百三十七平方米

・昭和三十一年十月　宗太郎分校運動場完成
営林署貯木場借用六百八十七平方米

・昭和五十六年三月　宗太郎分校廃校

定年を間近に家族を抱えながら、一大決意に燃え教育

重岡小学校児童数の推移

年　度	男	女	計	年　度	男	女	計
昭和 28	330 (49)	302 (36)	632 (85)	昭和 43	222 (15)	221 (20)	443 (35)
29	357 (43)	348 (52)	705 (95)	44	195 (12)	207 (16)	402 (28)
30	407 (59)	370 (56)	777 (115)	45	170 (6)	196 (6)	366 (12)
31	427 (56)	367 (46)	794 (102)	46	170 (5)	172 (7)	342 (12)
32	440 (59)	402 (47)	842 (106)	47	147 (4)	157 (6)	304 (10)
33	450 (23)	395 (28)	845 (51)	48	145 (7)	150 (7)	295 (14)
34	470 (39)	419 (37)	889 (76)	49	135 (5)	145 (7)	280 (12)
35	447 (40)	404 (37)	851 (77)	50	140 (4)	142 (9)	282 (13)
36	399 (35)	368 (30)	767 (65)	51	136 (8)	134 (8)	270 (16)
37	371 (32)	354 (29)	725 (61)	52	119 (4)	128 (7)	247 (11)
38	320 (21)	310 (32)	630 (53)	53	118 (4)	128 (6)	246 (10)
39	289 (19)	296 (39)	585 (48)	54	117 (1)	121 (4)	238 (5)
40	272 (21)	273 (30)	545 (51)	55	125 (1)	121 (3)	246 (4)
41	274 (28)	261 (34)	535 (62)	56	123	123	246
42	251 (23)	253 (25)	504 (48)				

※（　）は分校児童数

の終着駅を、分校の子ども達に捧げたい情熱を胸に、自ら求められ赴任された木田先生御一家は、昭和二十八年四月木立小学校より、重岡小学校宗太郎分校に転勤引越しをされた。

営林署の倉庫を借り、教室兼住宅ということで、寺子屋のような長机だけのまことに、お粗末な現状であったという。

木田先生着任、その第一の仕事は分校開設ということで、未就学児の家庭を廻り、就学をすすめる事だった。先生は家庭訪問や話し合いをするために、山深い里を日夜を問わず説得するという大変な日々であった。

初代の木田先生は、朝鮮よりの引揚げで、国東町の御出身である。定年まで残された四年間を、この地で分校教育に燃え尽くされた先生である。まさに分校教育の聖者と讃えたい気持でいっぱいである。

先生はすでに亡くなられ、現在延岡市に奥様が御健在ということで、当時の様子を思い出すがままに語っていただく事が出来た。

分校の中に家庭、家庭の中に分校といったくらしで、どの子も皆自分の子どものようであった。私は「おばさん」と呼ばれ親しまれていた。主人に叱られた子どもは、助けを求めて家にとびこんで来たり、お昼になればおかずにと「とうじん干し」を焼いたり、女の子の「シラミ」取りに、DDTを頭髪にふりまいたり、汚れた身体はタオルで拭いてやったり、服のボタン付け、破れの繕い、けがの手当と、毎日毎日が分校の子ども達のお母さんの様な存在であった。

又、こんなこともあったという。ユニークな山の子ども達は勉強が嫌いだった。木田先生が放課後の勉強を「〇〇時」までと指示して、教室を出ると間もなく「おばさんちょいと来て。」といって時計の針を進めてほしいと頼まれたりした事も忘れられない思い出のひとこまだと話して下さった。子ども達は働く事が好きで、その中でも薪わりはすごく上手で、毎日のくらしの中で大変助かったとつけ加えて話された。

周囲を山にかこまれた宗太郎の冬は、きびしく日がさすのが十時過ぎ、山の端に太陽の沈みも早く日照時間が短く、ツララのとける時がなかったという。

当時の宗太郎分校の子どもは、地元・営林署・駅に勤める人・山関係の子ども達であった。山で働く親達は就

学については難色を示し、なかなか応じなかったという。その理由として、分校までの通学距離が遠い（二里餘）又、山仕事は主に炭焼で、ひとつの山が終われば、半年位で次の山に移動するし、天候の都合で通学条件がよくないこと。その上、当時としては親は仕事、仕事に追われ教育に対しての関心度がうすかったという。こんな訳で年令も就学時をはるかに越え十七、八才になって、通学したという子もいたそうである。

通学については、営林署の方々、先生方の献身的な協力で車で通学できたという。

年令差があり複式という教育条件の中、木田先生を始め職員の懸命な指導の成果は、すばらしかった。ある時、分校卒業生が来訪し「先生のおかげでトラックの運転免許がとれて、とてもありがたかったです。」と報告に来てくれた時、立派に成人したその姿を見て、うれしくつい涙がこぼれましたと話して下さった。

分校での四ヶ年間の月日は次から次へと、なつかしい思い出となって駆け廻り、奥様の弾んだ声が若々しく、とても印象的であった。奥様のひとつひとつの話の中から、ほのぼのとした教育の神髄にふれる思いがした。教育って！生きとし生きる者同志の心の通じ合い、通じ合える情熱と努力、そして人間愛切々と胸に迫るものを覚えた。

言葉の初対面で長い電話も快く応対して下さり、まだ見ぬ奥様のやさしいお人柄とぬくもりが伝わってくる思いがした。

こんなあつい思いを胸に車で宗太郎分校跡に向かった。

宗太郎分校跡全景

青山～丸市尾～葛原～蒲北トンネル通過、宮崎県の北浦～北川経由で、国道十号線に出て宗太郎に到着した。

地区内に入り分校跡を尋ねた。

「うちの子も分校を出ました。その時は営林署・駅関係の子どもさんも多く四十人位いました。」と分校を指さしてくれた。地区内の行事は、ほとんど分校が中心となり、秋の運動会は村をあげての参加で一年の最大行事で、にぎやかで楽しかったと当時を振りかえりながら話してくれた。「分校がなくなったら村の灯が消えたようで淋しくなりました…」と。

こんもりと茂った坂道を歩いて行くと、目の前に洋風式のアーチ形の入口にびっくり仰天した。長崎のグラバー邸が、直観的に浮かんで来た。当時としてはすごくモダンな分校として、子ども達の自慢のひとつだったと想像される。校舎内外はよく整備され、地区の集会所として分校跡は息づいている。アーチ式の入口の門は、実は校舎の裏手で横を通って運動場に出てみた。広い運動場には使い古された遊具や、体育用に埋め込まれたタイヤが色あせ分校跡の淋しさに身がつまされる思いがした。運動場の周囲の木々が、うっそりと繁りなんだか、うす暗く感じられた。

アーチ型のモダンな裏門

「子どものいない学校なんて！こんなにわびしいものか…」と思った瞬間、ゴーと校舎のすぐ上を、特急のシーガイアが通過した。日豊本線がすぐ上を通っていたんだと気がついた。分校跡、そして新しい時代の流れが、波のように頭の中を交錯した。

木田先生から次々とバトンタッチされ、三十年近く、その間、宗太郎分校に務められた先生方本当に御苦労様でした。何かと不便な条件の中で分校でしか味わうことの出来ない日々の教育実践、全校の子ども達とのかかわりあいの中で生まれた数々のエピソード。廃校という時代の波は致し方ないが、子ども、地域の方々、先生方、ひとりひとり沢山の思い出が、心の灯火としていつまでも消えることなく燃え続けていることと思う。

宗太郎分校最後のしめくくりは、後藤先生御夫妻であ

った。素晴らしい指導の学習成果は全国放送され宗太郎分校教育に金字塔をうち立てた。分校の子ども達ひとりひとり『やればできるんだ』という自信と勇気が生まれた。

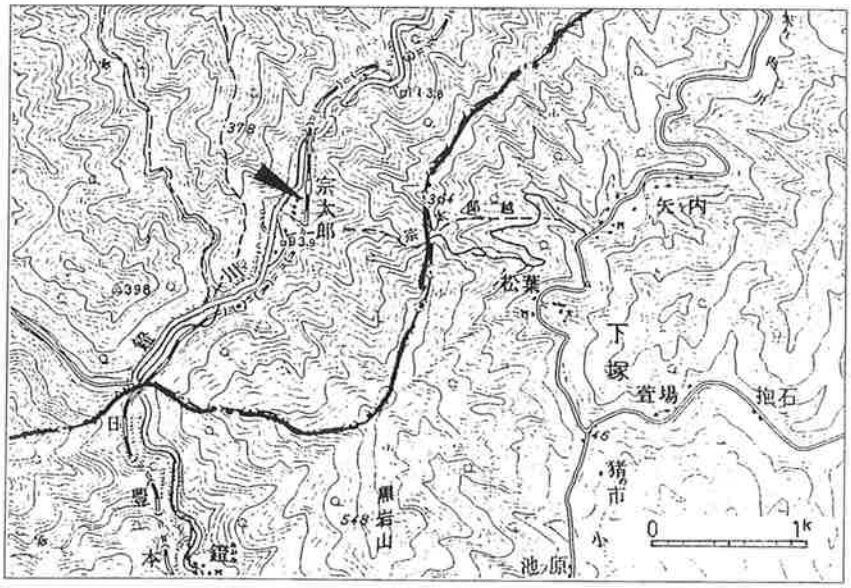
分校を巣立った子ども達はそれぞれに成人され各地域で活躍されている。故郷宗太郎に残っている人は少ないという。

幾星霜を経た今日、木田先生の奥様に分校の子どもから便りが届くとのことである。

現在「宗太郎」には、小・中学生はいない。

世帯数十　人口二十一人

・参考文献　宇目町誌

・聞きとり　木田先生奥様

・重岡在住の渡辺タカ先生の御力添えをいただきました。